

一般演題（口演）

2025年11月2日(日) 14:10～14:50 第5会場

[O] 一般演題（口演） 「薬剤師職能」

座長:菅原 満(北海道大学病院 教授 薬剤部長), 鈴木 直哉(株式会社ナカジマ薬局 薬局事業部 課長代理)

[O-5-01]

薬局薬剤師によるドライパウダー吸入製剤適正使用支援～吸入トレーナーを用いた吸引力評価とデバイス変更提案の有用性検証～

○垣内 雄二¹, 加藤 裕立², 村井 剛³, 近藤 良樹⁴, 石綿 宏光⁵, 安田 将也⁶, 平松 良宏⁹, 中山 慎太郎⁷, 河口 英史⁸, 齋藤 仁¹⁰ (1.総合メディカル（株）ハロー薬局 則武店, 2.犬山店, 3.カラフルタウン岐阜店, 4.大垣中央店, 5.さぎ山店, 6.いなば店, 7.大垣駅前店, 8.福光店, 9.柏友堂薬局, 10.総合メディカル（株）)

[O-5-02]

保険薬剤師のトレーシングレポート送付経験にかんする因子の検討：横断研究

○中本 健太, 松井 優子, 松木 史, 田中 佑樹, 真子 楓 (（株）なの花西日本)

[O-5-03]

スポーツファーマシストチームによるOTC医薬品使用可能リストの展開における社内の使用実態調査と今後期待される役割

○釦持 佑一¹, 石原 一磨², 對馬 遼³, 長谷川 凌平⁴, 末澤 千恵⁵, 庄村 元希⁶ (1.（株）なの花中部 なの花薬局 豊川赤坂店, 2.鎌田店, 3.名古屋長須賀店, 4.おかわち店, 5.河芸店, 6.事業部教育セクション)

[O-5-04]

保険調剤薬局薬剤師による減薬の取り組みとその社会的意義

○佐々木 剛¹, 染谷 光洋¹, 谷口 亮央¹, 佐藤 楓², 樋浦 一哉², 山下 美妃², 中島 史雄¹ (1.（株）ナカジマ薬局, 2.北海道科学大学)

一般演題（口演）

2025年11月2日(日) 14:10～14:50 第5会場

[O] 一般演題（口演） 「薬剤師職能」

座長:菅原 満(北海道大学病院 教授 薬剤部長), 鈴木 直哉(株式会社ナカジマ薬局 薬局事業部 課長代理)

[O-5-01] 薬局薬剤師によるドライパウダー吸入製剤適正使用支援～吸入トレーナーを用いた吸引力評価とデバイス変更提案の有用性検証～

○垣内 雄二¹, 加藤 裕立², 村井 剛³, 近藤 良樹⁴, 石綿 宏光⁵, 安田 将也⁶, 平松 良宏⁹, 中山 慎太郎⁷, 河口 英史⁸, 齋藤 仁¹⁰ (1.総合メディカル (株) ハロー薬局 則武店, 2.犬山店, 3.カラフルタウン岐阜店, 4.大垣中央店, 5.さぎ山店, 6.いなば店, 7.大垣駅前店, 8.福光店, 9.柏友堂薬局, 10.総合メディカル (株))

【目的】 ドライパウダー吸入製剤（以下、DPI）は、高齢患者を中心に吸引力不足による吸入不良が課題となる。医療機関での継続的な吸入指導が十分でない現状を踏まえ、本研究では、薬局薬剤師が吸入トレーナーを用いた吸引力評価と、必要に応じた医師へのデバイス変更提案を実施。その後の吸入指導と喘息症状の評価を通じて、薬局薬剤師による介入の有用性を検証した。

【方法】 2024年2月22日～6月30日に岐阜県内のグループ内9薬局を受診し、DPIを1か月以上使用している患者を対象とした。吸入トレーナーで吸入手技をスコア化し、適正使用を評価した。さらに不備が確認された患者には吸入指導と再評価を実施した。DPIの使用が不適と判断された場合は、医師にデバイス変更を提案し、変更後も継続的に吸入指導を行った。喘息症状は喘息コントロールテスト（以下、ACT：20点未満をコントロール不良）で評価した。（総合メディカル倫理審査委員会承認番号：SMG2023105）

【結果】 対象者19名のうち9名（47%）に吸入手技の不備が認められた。吸入指導により7名（78%）の手技が改善し、3名は薬剤師の提案を受けた医師の判断によりエアゾール剤へ変更された。エアゾール剤に変更された3名うち2名が後日来局し、ACTスコアは10点から23点、16点から25点へと改善した。

【考察】 DPI使用患者の約半数に吸入力不足が見られ、定期的な手技確認と指導の重要性が示唆された。吸入手技のスコア化とACTスコアの併用は、喘息コントロール評価に有用である可能性が示された。また、吸入力不足やACT低値の患者に対する薬剤師の介入と適切なデバイス変更が、ACTスコアの改善に繋がることが示された。これらの結果から、患者の状態に応じたデバイス提案を含む薬剤師の吸入指導は、DPIの適正使用を支援する上で有用であると考えられる。

一般演題（口演）

2025年11月2日(日) 14:10～14:50 第5会場

[O] 一般演題（口演） 「薬剤師職能」

座長:菅原 満(北海道大学病院 教授 薬剤部長), 鈴木 直哉(株式会社ナカジマ薬局 薬局事業部 課長代理)

[O-5-02] 保険薬剤師のトレーシングレポート送付経験にかんする因子の検討：横断研究

○中本 健太, 松井 優子, 松木 史, 田中 佑樹, 真子 楓 (株) なの花西日本)

【目的】 外来がん化学療法施行患者の有害事象を防ぐために、多職種での情報共有が重要である。本研究の目的は外来がん化学療法施行患者（以下、化学療法患者）のトレーシングレポート（以下、TR）送付の実態とTRフォーマット・業務フローの有無を明らかにし、TR送付に関連する因子を明らかにすることである。【方法】 2025年1月16日～2月13日に、保険薬局店舗に勤務する薬剤師を対象に質問紙調査を実施した。主要評価項目は過去1か月間の化学療法患者のTR送付経験、副次評価項目は所属店舗における抗がん剤TRフォーマット・業務フローの存在とした。ロジスティック回帰分析を用いて、化学療法患者のTR送付経験に関連する因子を検討した。【結果】 調査対象薬剤師322人のうち39.1%が解析対象となった。解析対象者背景は男性26.2%、薬局勤務年数中央値7年[四分位範囲3-17]、病院勤務経験ありは17.5%であった。過去1か月間の化学療法患者のTR送付経験ありは13.5%、所属店舗における抗がん剤TRフォーマット・業務フローの存在ありはそれぞれ7.9%、6.3%であった。ロジスティック回帰分析の結果、抗がん剤TRフォーマットの存在（オッズ比5.87, 95%信頼区間1.3-26.7, $p=0.022$ ）・所属店舗における外来がん治療認定・専門薬剤師の在籍（オッズ比4.06, 95%信頼区間1.3-12.8, $p=0.017$ ）・時間的余裕（オッズ比3.36, 95%信頼区間1.1-10.3, $p=0.035$ ）と化学療法患者のTR送付経験に有意な関連が認められた。【考察】 抗がん剤TRフォーマットの存在がTR送付経験と有意に関連し、送付可能性を約6倍高めることが示された。しかしながら、抗がん剤TRフォーマット・業務フロー整備率は10%未満と低く、過去1か月のTR送付経験も13.5%に留まっている。標準化されたTRフォーマットの普及と外来がん治療認定・専門薬剤師の育成、それらを活用するための教育・支援体制の構築が、医薬連携による外来がん治療の質向上に有用である可能性がある。

一般演題（口演）

2025年11月2日(日) 14:10～14:50 第5会場

[O] 一般演題（口演） 「薬剤師職能」

座長:菅原 満(北海道大学病院 教授 薬剤部長), 鈴木 直哉(株式会社ナカジマ薬局 薬局事業部 課長代理)

[O-5-03] スポーツファーマシストチームによるOTC医薬品使用可能リストの展開における社内の使用実態調査と今後期待される役割

○ 鈿持 佑一¹, 石原 一磨², 對馬 遼³, 長谷川 凌平⁴, 末澤 千恵⁵, 庄村 元希⁶ (1. (株) なの花中部 なの花薬局 豊川赤坂店, 2. 鎌田店, 3. 名古屋長須賀店, 4. おかわち店, 5. 河芸店, 6. 事業部教育セクション)

【目的】弊社では有志によるスポーツファーマシストチーム（以下、チーム）を結成している。社内薬剤師を対象とした過去の調査では、ドーピングに該当する薬剤の情報を希望する声が多く寄せられた。その中でも緊急時に使用頻度が高いOTC医薬品におけるドーピングの該当有無を判断できる資料を望む声もあった。それを受け2024年7月に『競技会時にも使用可能な、自社で取り扱いのあるOTC医薬品の一覧』（以下、リスト）を作成し、社内展開した。本研究ではリストの使用状況を明らかにし、ドーピングに限らず今後チームに望む情報について調査した。

【方法】2025年1月20日から1月31日に弊社に所属する薬剤師139名に対し匿名Webアンケートを実施した。調査項目はリストの認知・閲覧・使用実績を単一回答とし、今後チームから発信を望む情報を複数回答とした。

【結果】回答者数55名（回答率40.3%）。リストの認知度52.7%、閲覧率20%、使用実績0%であった。チームから発信を望む情報は、「国内販売のサプリメントとドーピングの関連性」が60.0%で最も多く、次いで「スポーツ薬理学・スポーツ医学の情報」が36.4%、「健康維持に関する情報」が34.5%の順で多かった。

【考察】今回の研究でリストの認知度が過半数であったことに対し使用実績がなかったのは、弊社全体でOTC医薬品に対するドーピング相談は少ない可能性が考えられる。また希望する情報について、ドーピングに限らないスポーツに関係する情報が多かったことから、様々な人への活用を想定していることが示唆された。2025年度にはスポーツファーマシストのカリキュラムも変更される。今後はチームとして、アンチ・ドーピング活動に留まらず、スポーツを通じて健康増進につながる情報発信や健康フェアの開催など積極的な活動が求められる。

一般演題（口演）

2025年11月2日(日) 14:10～14:50 第5会場

[O] 一般演題（口演） 「薬剤師職能」

座長:菅原 満(北海道大学病院 教授 薬剤部長), 鈴木 直哉(株式会社ナカジマ薬局 薬局事業部 課長代理)

[O-5-04] 保険調剤薬局薬剤師による減薬の取り組みとその社会的意義

○佐々木 剛¹, 染谷 光洋¹, 谷口 亮央¹, 佐藤 楓², 樋浦 一哉², 山下 美妃², 中島 史雄¹ (1. (株) ナカジマ薬局, 2. 北海道科学大学)

【目的】高齢者を中心に進行するポリファーマシーは、有害事象・服薬アドヒアランス低下の要因となり、医療費の増大にもつながる重大な課題である。特に、漫然投与や潜在的に不適切な医薬品（PIMs STOPP-J基準）の投与は、薬物療法の質低下を招く危険性がある。薬剤師による処方介入が注目される中、服用薬剤調整支援料¹（本支援料）の算定症例を解析し、減薬の特徴と臨床的意義を明らかにすることを目的とした。

【方法】2023年1月1日から2024年1月31日の期間内に株式会社ナカジマ薬局に所属する59店舗を対象とし、本支援料を算定した症例を抽出した。処方内容および薬剤師の介入内容を調査し「減薬薬剤の特徴」、「減薬理由と継続性」等を後方視的に解析した。

【結果】対象期間中において本支援料の算定は67件行われ、そのうち在宅患者が57件（85.1%）を占めていた。減薬前後の薬剤数中央値は10剤から8剤へと減少し、計168剤が中止された。減薬対象となった薬効分類は、消化性潰瘍治療薬、NSAIDs、緩下剤、アレルギー治療薬、漢方薬が上位を占め、減薬理由の71.4%（120件）は漫然投与であった。さらに、減薬となった67件について、減薬開始後から6か月間追跡したところ、79.8%が再開されることなく経過し、減薬の状態が維持された。

【考察】本研究では、減薬理由の大多数が漫然投与の是正であり、処方が患者の状態変化に応じて見直されていない実態が明らかとなった。薬剤師による介入により、PIMsに該当する薬剤だけでなく、PIMsに記載されていない漢方薬も減薬対象となっていた点は、本研究の新たな知見といえる。約8割の症例で減薬状態が継続し、薬剤費は1か月あたり186,915円削減され、1件あたりの医療費抑制効果は約1,500円と推定された。これらの結果は、薬剤師が処方適正化と医療資源の効率化に貢献していることを示唆している。